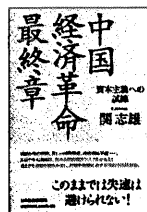


## 『中国 経済革命最終章』

資本主義への試練

関 志雄著 (野村資本市場研究所シニアフェロー)

日本経済新聞社  
1890円

中国の経済改革は、ロシアのそれが急進的であったのと対照的に漸進主義的であり、それがゆえに社会的安定性を保ちながら高成長を持続できた、という評価が一般的である。

◎評者 渡辺利夫 (拓殖大学学長)

所有権構造に踏み込めない  
国有企業・国有銀行改革

国有部門という旧体制を温存しながら、その周辺に新体制の急成長を図り、時の経過とともに後者の比率を高めて、最終的には新体制への全面的な移行を完成するという図式である。

厳然として存在する。国有企業と国有商業銀行の改革が容易に進まず、二つが相まって中国のマクロ経済の順調な進行を妨げていることを主張す

できず、収益性が上がらない。むしろ、「国有企業の効率を高められなかったにもかかわらず、経営自主権を拡大させてしまったことは、かえって国有企

既得権益層の抵抗によって、長期にわたって温存されてしま

る本書は、どうやらその立場に立っているといえよう。

う。既得権益層が独裁的政治権力と深く癒着している中国のよ

うな国の場合には、その傾向が強まっている。最後の所有権構造に

までは踏み込めないでいる。

それゆえ「政企不分」と「コーポレート・ガバナンスの欠如」を払拭

できず、収益性が上がらない。

むしろ、「国有企業の効率を高められなかったにもかかわらず、経営自主権を拡大させてしまったことは、かえって国有企

業経営者の機会主義的な行為を助長させた」と著者は主張する。

中国の財政が、中央も地方も修復不能とも見える厳しい状況に置かれていることは、よく知られている。深刻な財政赤字の下で、なお国有企業という旧体制を支えるためには、国有商業銀行への政府支配をますます強化せざるを得ない。

しかし、銀行支配を通じて旧体制の破壊は避けられたものの、これによって国有銀行の金融仲介機能は麻痺状態におとしめられた。著しく高い不良債権比率がその帰結であり、金融メカニズムの効率性が大きく減殺された。

国有銀行の改革は、不良債権処理や自己資本比率強化の段階を超えて、株式制導入の段階に入ったが、これとて成功の保証はない。

「結局、国有銀行改革の行き着くところは、株式上場にとどまらず、政府が所有と経営を完全に放棄する民営化であろう」というのが結論である。

中国経済を見る関氏の目が、いつになく厳しい。